

幼稚園四十年(五)

誘導保育の思い出

菊池ふじの

「人形の家を中心として」後日譚

前号に「人形の家を中心として」(昭和七年記)を掲載するに当り、三十余年ぶりに再読したわけであるが、文体といい何から何まで冷汗を覚えた次第である。

あれをみるとあの記事は、「人形の家」がほぼ出来上った頃のものである。あれからはあの家でままごとをしたりしてよく遊んでいた。時にはお隣りの組の子どもたちまで加わって遊ぶことも時折り見受けられた。

あのような、子どもたちの自由になる一軒の家というものは、子どもにとっては非常な魅力らしい。

実はこの「人形の家」を作ろうと思った動機というのも、私が幼少の頃田舎で育ち、自分の家のまわりの木小屋とか竹やぶ、裏山などに、むしろを敷いたり、板を渡して板の間をつくったりして、友だちの各々が一軒の家をもって遊んだ楽しかった

た幼時の記憶によるのである。田舎であるから、むしろやなわ、板などは屋敷内の至るところにたくさんある。それを持ち出してみんなで、わが家を一軒ずつもったのである。

「あすこの竹やぶの家はきみちゃんのうち」

「こっちの木小屋にしたいむしろの家は美枝ちゃんのうち」といったようにみんなが別々の家を持ち、人形を抱っこしては訪問しあったり、ご馳走しあったり、ときにはいっしょに山にきのこ取りにいきましよう、などと誘いあったりして日の昏れるのも忘れて遊びほうけたものであった。あるときなどは夕方になったので、もう遊ぶのは止めて家へ帰るようにと再三母が呼びにきてもなお帰らず、遂に戸を閉められてしまつて、泣いてお詫びしようやく家へ入れてもらったことさえあった。

それで、アメリカからの人形使節をわが幼稚園でも迎えることになったのをきっかけにして、子どもたちが、自由に戸を開

いたり閉めたりして出入りのできる、一軒の家をこしらえて与え、自分が幼いときに味わったあの楽しさ、あのよろこびを味わわせ、子どもたちを狂喜させてみようと思っただけだ。この家を使って今までよりもっと楽しくはりきって遊んでくれたし、この「人形の家」づくりや、家具・調度・庭の諸々の製作にも、どの子も洩れなくすすんで、そして楽しんで参加してくれたからである。

つい先日のことであるが、その頃幼児として在園し、その人形の家で思うさま遊んだ昔の幼児が、成人していまは母親となり、女の児が四才になったが、幼稚園のときあそんだあの「人形の家」が忘れられず、自分の子どもにもあの楽しさを味わわせたいと思って、夫婦共同で「人形の家」を作ったから見にきてほしい、という手紙を貰ったので、郊外なる昔の幼児だったその人の家を訪れて、親しく若い両親の心のこもったその家を見たのであった。なるほどその家の南側のテラスに、半坪ほどの、家根も窓もあるかわいい家ができていた。近所の子どもたちがお天気をえよければやってきて、このかわいいお家で、ままごとがはじまるのだそう。きれいなカーテンは、遊びにやってくるお子さんの母親が、毎日遊ばせていただくから新築の御祝いにといつて縫ってきて下さったものとか、両親が心をこめて作っただけあって、なかなかきちんできていた。外に

おいてあるので、雨降りのときは？ときくと、はじめは少し漏ったから屋根の合わきり目にトタンを張ったら雨もりはしなくなったとのこと。外に置いても雨もりがしないなんてなくてしょ、とほめたことであつた。ただこの家が両親の合作でできている。子どもたちをも含めた協同製作であつたら、大人側にも、そして子どもの方にも、もっとも深く感じられたが、しかし、このように後々まであの「人形の家」があつたろうになどと私としてはいささか物足りなさが感じられたが、しかし、このように後々まであの「人形の家」があつたときの子どもたちに深い印象を植えつけたのかとか、またこの両親の、子どもをよろこばせたい、楽しませたいと願う親心に感動して、折角のこの両親の親心に水をさすような言葉は口に出さずにここを辞したのであつた。

二代目の人形の家

さて話はその後のことになるが「人形の家」での遊びがたけなわであつた頃のある日、倉橋先生と昵懇の間柄である同じ女高師の児童心理学の菅原教授から次のような申し出があつた。即ち「日本橋の高島屋で児童展覧会を開催する計画であるが、いま幼稚園でやっているこの「人形の家」のアイデアをそのまま使わせて貰えまいか、アイデアを貸して貰えまいか、勿論「人形の家」も、家の中の調度も、人形も一切高島屋が作り、展覧会が済んだあとはそこへ展示したものの全部を寄贈する」というのである。協議の結果承諾することになった。



二代目の「人形の家」・昭和9年11月頃の写真・応接間の「じゅうたん」や「ついたて」は教師と幼児の合作

高島屋で開催された展覧会は私も勿論見に行ったのであるが、さすがは専門家が作っただけあって、私の組でこしらえた家とは異なり、家根が傾いていたり、机や椅子の脚がそろわないためにがたつきたりするようなことのない、きちんとしたものであった。人形も私たちが作った布の人形を真似てつくり、かなり大きく、抱っこをしてそちこちつれて歩くのにちょうどよい大きさであった。顔の目鼻は刺しゅうで縫ってあるのであるが、その中に寄り目の人形も二、三あったのを思い出す。

高島屋の「人形の家」は、展覧会が済んだあとは、約束どおり、お家も、家具や調度も、人形も、全部寄贈を受けた。

これが二代目の人形の家になったわけである。この二代目の人形の家は、私たちがつくったのより広くて開放的であったので、大勢の子どもたちが一時にいっしょに遊ぶことができた。

この二代目の人形の家についての忘れない二、三の思い出を次に記してみることにする。

いまでも私の眼底にはつきりと浮かんでくるのは、台所と応接間との間をしきる衝立である。衝立の枠は木でつくり、家全体を塗った塗料の薄水色のカセインでぬった。衝立の絵は、片面は真赤な葉げいとう、もう一方の面は、橙色の三、四個の柿の実の实っている絵であった。菅原教授の助言で、葉げいとうも柿も、クレヨンで強くぬりつぶしたら、まるで油絵のようになり、われながら見とれてしまったのを思い出す。両面とも勿論

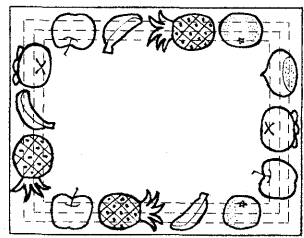
幼児の発想になる絵である。柿の絵は、太い幹のボツンと切った頂上に、一つの柿がなっているのである。他の二、三の柿の実も皆、太い幹をたち切ったような端にボツンとついている絵である。これには一時呆氣にとられたのである。美術の方にも造詣の深い菅原教授が感嘆して、これはまったく幼児の絵である、幼児ならでは、このような絵は到底描き得ないといって下さったので、私も意を強うしたことであつた。

この衝立の枠づくりは、なかなか技巧を要したものだつた。平面が二枚合わさつて、しかもそれがちゃんと立っていないければならないので、本ものの衝立を見にいったり、工夫をしたりして、無事立つ衝立をこしらえあげたのであつた。

いままで、家庭内のしごとでも、鋸や金鎚、釘など使うのは男子の役とばかり思つて育つてきたのであつたが、こうして一軒の「人形の家」を、それこそ言葉どおり曲りなりにもつくりあげ、その上、家の中の様子、テーブル、台所戸棚、流し、犬小屋、さては馬小屋までも、鋸や金鎚を使って、つくつたので、日曜大工というには、ほどとおいものではあるが、それでも大工仕事に類した家庭内の小さな不便は処理できるようになったのは、これひとえに「人形の家」づくりのおかげだと思つている。

も一つはこの家に敷いた二代目のじゅうたんである。

これも前の家のように、お米屋さんからお米を入れる



り抜き、これを以前にしておいた三本の毛糸の線の上にアップリケをしたのだつた。子どもたちの作になる素朴な果物類がいかに味があつて、これもいつまで見ていても飽きないおもしろいできばえであつた。

太い毛糸針でアップリケをするしごとは、女の子だけでなく、男の子たちもしたい、したいと申し出たので、望むがままに男の子にもさせたのであつたが、そのとき私は、この様子を見ながら、男の子が針をもつのは、生涯のうちでこれがはじめてで、そして最後だろう、幼い日の思い出に、男の子にだつてどんどんさせてやろうというわけで男の子も女の子も、それから朝登園してくる子どもたちを送ってきた附添いのおばあさんやお母さんまでもが、縫わせて縫わせてといつてアップリケに参加しては帰つていったものだつた。

戦後小学校の授業で、五年生の家庭科の時間に、男の子のボ

タン付けの授業を參觀したことがあったが、昔の縫いとりのときの感慨を再び思いだしたことであった。

「人形の家」の額の絵が古くなったから新しくしてあげましょうといったは、子どもたちを描画の生活に誘うし、カーテンが汚れたといったは洗濯をする。お人形さんが淋しそうだからみんなでお遊戯を見せてあげましょう。歌を聞かせてあげましょう。またお人形さんもみんなといっしょに先生のお話を聞きましょう、……等々この「人形の家」と「人形」とは、どんなに度々何代もの幼児のいろいろな生活へ誘導するいと口となったことであろう。またこの家での大勢の子どもたちの遊びは、どんなに大勢の子どもたちの、社会人としての素地を培ってくれたことであつたらう。

この人形の家は、数多く実施した誘導保育の中でも、最もスケールの大きい、発展性のある、そして子どもたちのよろこぶ保育案であつたと回顧している。

しかし、大東亜戦争が苛烈になり、敵機の襲来が頻繁になるにしたがい、わが園でも園庭の一隅に防空壕を掘らざるを得なくなった。全職員と保育の生徒たちとは毎日壕掘りに懸命になった。そして園にいるすべての幼児たちを、空襲警報が発せられたときはいつでも、この防空壕に避難させることのできる態勢を整えたのである。国内には板や釘、その他あらゆる資材が乏しくなつてきて、この防空壕の蓋にする板も周囲には見つけ

出すことができないまでになった。

長い間、何代もの子どもたちを、よく遊ばせてくれた「人形の家」ではあるが、いま襲いくる敵機の前に子どもたちの身を守るためには、このままごと用の「人形の家」も惜しむときではないと考え、園の防空壕の蓋に提供したのであった。

保育時間中に空襲があつて、子どもともども防空頭巾をかぶり、この防空壕に待避したことが幾度あつたらうか。このようにして「人形の家」はあとを止めず消え失せたのである。

この他に私が実施した誘導保育の主なものとは次のようなものである。〔（）内は後載の写真番号〕

動物園	紙箱利用(①)	水族館
飛行機(④)	木の箱利用(②③)	おみこし(⑤)
		八百屋(⑥⑦)
		時計屋(⑨)
		魚屋

なおこの当時は、私だけでなく、ほかの組でも、一連のまとまりのある、あるテーマを中心とした保育を行なっていた。本誌前号に掲載になった「旅へ」(新庄よしこ先生)とか「わたくしたちの自動車」(徳久孝先生)のように、倉橋先生のおっしゃった所謂誘導保育——園における幼児のいろいろの活動が、中心テーマから誘い導き出されるという意、と私は理解していた——をさかんに行なっていたのである。

「系統的保育案の実際」の刊行

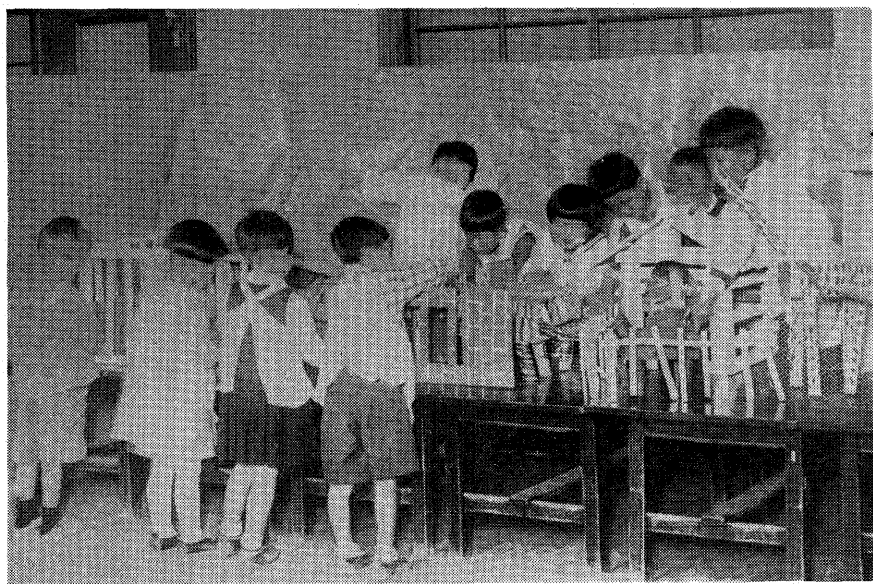
一方幼稚園教育も盛になり、幼稚園の数も次第に増加し、園

に勤める保姆さんも多くなったので、保育に関する質問などもしばしばあるようになった。そこで、園でやっている保育を職員全体で討議して「系統的保育案の実際」（昭和十年七月二十日初版）というのを印刷にして出版した。これが反響をよんで四版（昭和十六年七月出版）まで版を重ねた。この系統的保育案は大判の頁のもので、簡単な表のような形式のものであって、簡単に表に現わしただけのものなので、実際のことが分りにくいらしく、この書に対してもしばしば問い合わせがあったので、ある日の職員会議のとき、先生は私ども一同に向かって次のようなことをおっしゃった。

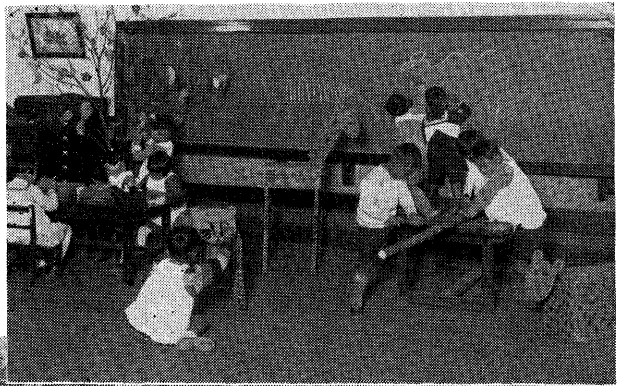
系統的保育案の解説の執筆

「この幼稚園でやっている保育のよいことは、我々はよく知っているが、これをひとつ、こんどは「幼児の教育」に掲載して、全国の幼稚園にも知って貰おうではありませんか。それでとりあえず、去年出版した「系統的保育案の実際」の解説を、みんなで手がけましょう。だからこれからは、雑誌に執筆をする、という気構えでやってもらいたい」

ということをいわれ、昭和十一年の三月号（幼教第三十六卷三号）から向う一カ年にわたって、職員各々が、それぞれ分担して「系統的保育案の実際」の解説という標題の下に執筆した。どういふことで決めたかそのときは記憶していないが、私は「誘導保育」という欄を受けもった。



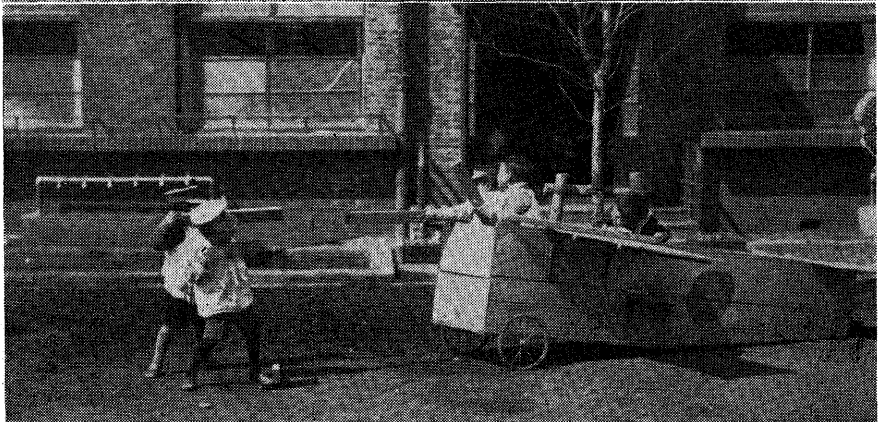
①紙箱を利用した動物園 昭和11年5月末の写真



② → 木の箱を利用しての動物づくり
昭和10年5月頃の写真

③ ↓ 園庭が動物園
9月の第2学期のはじまるときは
子どもたちに秋の虫をとの思いや
りで、雑草は園庭の一部を残して
おいたのであった

昭和10年9月末頃の写真



④ 飛行機・みんなでおして走らせる 昭和9年3月月の写真



⑥ ↓ 昭和8年6月頃の写真

⑤ → おみこし 昭和25年9月末頃



(お茶の水女子大学附属幼稚園)

またこの頃、保育項目の一つに加わった観察の実際についても、混迷模索の時代だったので、このことも常に私たちの研究題目であり、一応のまとまりをつけて、「観察の実際」としてフレール館から出版した。(昭和十三年七月初版) このような保育の盛り上がり、高まりは、昭和十六年十二月の大東亜戦争のはじまるまでつづいたが、戦争の勃発によって次第に萎縮し、終りを告げたのである。

(7) ↓ 八百屋 昭和14年2月





⑧くだものや 物資の不足が店の材料にも子どもたちの服装の上にも感じられる 昭和25年初冬の頃



⑨時計屋の店 昭和28年6月